

身体と対話する学びを活性化する授業の改善

稲葉 淳郎・根岸 伸之

はじめに

昨年度、私たちは「評価がはたらく『身体と対話する授業』の改善」というテーマで研究に取り組んできた。その結果、以下のような成果と課題が明らかになってきた。

成果

子どもの側からの運動理解に基づき想定した活動構成や支援は、特に【思考・判断】の確かな伸びを保証するものであることが明らかとなった。

目標とする【思考・判断】や【技能】、【学ぶ態度】を子どもたちがとらえ、共有していく道筋や活動のあり方が見出すことができた。

評価規準・判断基準を共有していく道筋が見出せた。また、評価規準・判断基準を共有することにより確かな【思考・判断】に基づく【技能】の高まりが現れることがわかった。

課題

運動のまとまりによっては、確かな【技能】の高まりが十分でない。そのため、【思考・判断】を動きへと実現する手立てを明らかにして、確かな【技能】の育ちを保障するカリキュラムへと改善する必要がある。

昨年度行った高学年での評価セッションは、初めての取り組みであった。行ってみて【思考・判断】が高い子の【技能】の伸びが見られることがわかったが、現在直面している問題意識を掘り起こし、解決までの見通しをもつことができるものにしていく必要がある。

今年度はさらに評価セッション、それに加えビデオカンファレンスや学習カードなどの指導法のあり方を工夫すれば、学習が子どもたちの内面に響き、よりよい動きやよりよい身体の実現に向けてより大きな成果をもたらすのではないかと考えた。また今年度は「身体との対話」をする学びを通して幼稚園から中学校へとつなげていくことも探っていきよりよい体育学習のあり方をこれまで以上に長いスパンを想定して研究することにした。

1 体育学習における「身体との対話」とは

私たちは子どもたちが体育学習を行う際には、子どもたちが自分の「身体との対話」をすることが重要であると考えている。「身体との対話」とは自分の動きを感じ取り、はっきりと意識化するということである。自分の身体の中にある動きの感じを顕在化し、それを意識化することで、そのことが自らの運動の課題となり、よりよい自らの動きをつかんでいくことにつながっていくものとする。また、自分の動きの課題が明確になると動きの感じをもとに他者との関わりも密になってくる。身体との対話がなされることで、自分の課題をつかみ、その課題を他者との共有・交流を重ね、よりよく問題を解決していくことで、自分や友だちの動きを高めていくのである。子どもの身体と対話する力が高まり、自分や友だちの身体を意識する力が高まるほど、体育学習における子どもの学びが営まれるのである。この過程で、子どもたちは動きの本質にふれ、よりよい運動学習へ、ひいてはよりよい自分やよりよい他者との関わりへと高まるものと考えている。

運動領域においては「身体との対話」がなされる運動学習を進めていくことで、子どもたちが運動を「わかってできる」状態を生み出すことが重要だと考える。器械運動においては自分なりの「コ

ツ」をつかむことである。

器械運動のハンドスプリングを例に挙げてみる。

- ・ 台上前転はできるけどヘッドスプリングができないなあ
- ・ 腰がなかなか上に上がらないなあ
- ・ 腰を意識して練習してみよう
- ・ 腰に天井からロープがつながっていて吊り上げられているような感覚でやってみよう
- ・ 腰に加えて足は振り下ろすような感じでやってみよう
- ・ できた！今の感じを大切にしよう。

指導者は子どもの感覚をつかみ、感覚に訴えかけるようなはたらきかけをすることが重要なのである。

また、身体と対話する学習は体育の運動領域のみならず保健領域にもまたがっていると考える。保健領域における学習においても、自分を見つめることや、友だちとの交流が重要である。自分の体を豊かにするために顕在化した感覚を生かしていくことでは両者は共通していると考えられる。身体との対話からよりよい動きを学んでいくのが運動領域だとすると、身体との対話からよりよい身体のあり方を学んでいくのが保健領域であると考えられる。本校では身体と対話する力の育ちをふまえた6年間のカリキュラムを構成し、子どもたちをよりよい姿へと高めていこうと考えている(図1)。

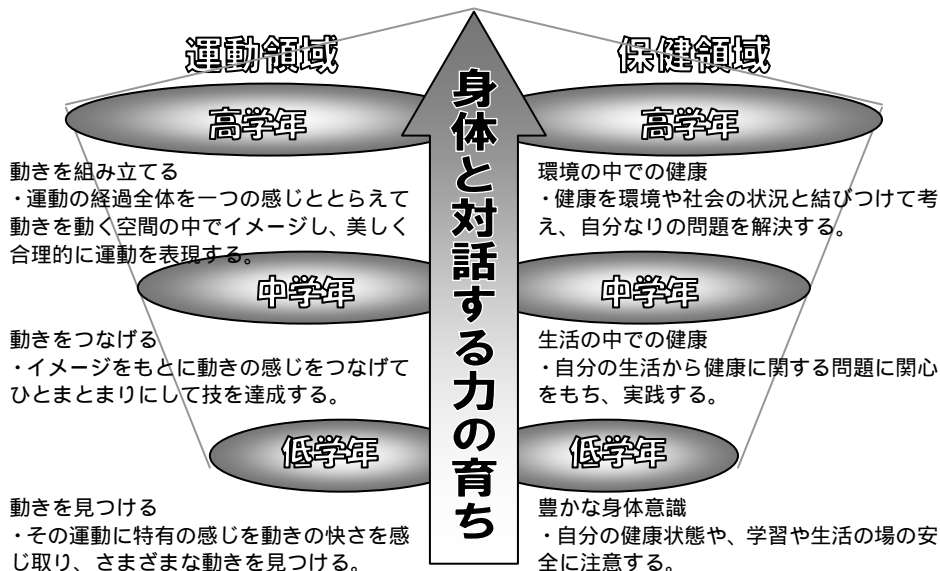


図1 「身体との対話」をする力の育ちと子どもの学び

2 「身体との対話」を促進する指導のてだて

子どもたち一人一人が「自分が学んでいく」実感を培い、より意欲的に、より主体的に学習に取り組むことが大切なのである。身体と対話するという子ども自身がもっている力を、指導者の手だてによって活性化することが今年度の研究テーマである。

体育学習では運動に対して「やってみよう」という意欲や、うまくいった快感を味わいたいということがあふれる。全力を出して動いたこと、できたこと、発見したことの快さや楽しさにふれることを私たちは「快の経験」と言ってきた。運動選手がはた目から見ていて辛いようなことでも何度も練習をすることもこれにあてはまる。リレーのバトンパスで身体が感じる「ぴったり感」、跳び箱を跳び越えることができた「ふわっと感」。このような「快の経験」から湧き上がる意欲を大切に、その意欲を生み出すような指導や支援の研究を重ねていきたいと思う。

身体との対話を重ねた結果、子どもたちをよりよい姿へと導こうとするとき、子どもたちに正しい動きの感覚を身につけさせることが重要だと考える。補助したり、補助の場を設けたりして、自分の感覚とどこが違うのかを自覚し、正しい動きをの感じをめあてとして取り組んでいくようにしなければならない。

テーマでかかげた「活性化」とは、身体との対話を促進させ、子どもたちが自分の願いや思いをもち、さらになりたい姿を明確にイメージし、学習過程の中で自分の学習段階を把握し、より明確なめあてをもって学習に取り組むことで、学習意欲や思考・判断が高まり技能が向上していくということである。

活性化を実現させる具体的な手だてとして、評価セッション、評価規準・判断基準の共有、学習カード、ビデオカンファレンスなどが考えられる。これらにより、子どもたちがよりよい自分になっているという確かな満足や手ごたえを実感しながら学習を進めていくようにはたらきかけようとするのである。

評価セッション

まず、自分たちの目標を決める目標設定セッション。次に、学習がある程度進んだ段階で具体的な事実から現状を把握する中間評価セッション。ここでは具体的な事実を最初に作成した評価規準・判断基準に加えることで、より具体的な評価規準・判断基準を作成する。最後に、最終的に自分たちの学習がどうだったのかを具体的な事実から判断していく最終評価セッション。このように単元の進行状況に応じて、自分の学習状況を友だちと具体的な事実をもとに話し合いながら、自分自身をふり返り、新たな課題を見つけ出していく活動である。自分の運動学習を事実に基づいてふりかえり、そのときに自分の身体がどうだったのかを振り返ることが大切である。子どもたちの身体との対話を深めていくことを意図している。

評価規準・判断基準の提示

子どもの動きの事実に基づいたことをまとめて子どもたちに提示する。これまでは指導者のみがかけていたものを子どもと指導者が共有することで、子どもが現在の自分の達成状況と自分の課題を明確になるようにする。これにより、子どもが次の段階に向けての具体的なイメージをもつことができ、それに向けて取り組んで行くのである。次のめあて、さらに次のめあてを見つけるときには評価規準・判断基準に書かれていることから見つけ出せばよいのである。子どもたちが身体との対話を活性化させ、自ら学習を進めていくために、評価規準・判断基準は重要な役割を果たすのではないかと考える。

学習カード

子どもの記述に対しては、時には情緒面、技能面にはたらきかけることも重要であるが、「身体との対話」に訴えかけるような指導者からはたらきかけが中心となる。また、友だちとの交流をうながしたり、できたときの感じを記録にとどめておいたり、友だちからのアドバイスを記録しておいたり、子どもに応じたはたらきかけが必要となってくる。カードを書いたことによって学習が進んでいったり、深まっていったりというように、子どもたちがカードを書いてよかったと思うような支援が重要となってくる。

「総合器械 ～集団による器械運動～」での子どもの記述とそれに対する指導者の記述の例を3

つ挙げてみる。

- ・友だちとの交流を促す

子どもの記述	指導者のコメント
Hさんにハンドスプリングのコツを教えてくださいました。足を向こう側にとばすかんじです、と言われたので、やってみるといい感じでできました。 けど何か、あしがあんまり伸びていないのでがんばります。 自分なりのコツは全身を伸ばしてそこで足を引くことです。	友だちとコツの交流をして、さらによりよい姿をめざしていこう。 ひざが曲がっているのでマットできちんとできるように練習して、ひざを伸ばしてはねる感覚を確認しよう 次回Mさんが意識していることをたずねてみよう。

このような児童は、ある程度技能の高まりが見られているが、技に改善の余地がありより洗練された動きをめざしていこうとするケースである。具体的な練習方法を示したり、友だちとの交流を意図的に設けたりして、支援していくことが必要である。

- ・できたときの感じを詳細に記録することを促す

子どもの記述	指導者のコメント
ヘッドスプリングの練習方法でブリッジをするのがあったんだけど、そのコツは足に勢いをつけると自然と体が起きあがるのが分かった。	足を振り下ろす練習ですね。ここで感じたことをそのまま跳び箱の上でやってみるといいよ。それがそのままヘッドスプリングのコツになります。今の感覚を大切にしておこう。

この児童は、跳び箱でのヘッドスプリングをするために、マットで補助運動を行っている。指導者が補助をしたり、補助運動の場を設けたりすることで、子どもたちは正しい動きの感じを身に付けていく。感じた動きを次回につなげるために学習カードに感じたことを記入させ、動きの感じを意識づける事が重要である。

- ・感じたことや意識したことを記録することを促す

子どもの記述	指導者のコメント
倒立の時なかなか足が上がらず、どうしたらいいか分からなかったけど、友だちにアドバイスをもらってはじめより上がるようになりました。とても親切に教えてくれて分かりやすく嬉しかったです。もう少し左足が上がったらいいと思いました。	友だちからはどんなアドバイスをもらいましたか。詳しく書いておくといいですよ。これが次回の課題になります。また自分の感じたことや意識したことも書いておこうね。

この児童はなかなか倒立ができない。倒立の正しい動きを身に付けていくために、自分の身体で感じたことや意識したことを書きこんでおく、児童にとって学習の記録、次時へのつながりになる。指導者は次回に書きこむポイントを示すことで学習効果を上げるねらいがある。

このように子ども相互、あるいは指導者が子どもの学習を支えていく重要な手立てとして学習カードは学習にいかされている。身体との対話が活性化されるようなことを取り上げ、子どもに返していくことが大切である。そして身体との対話を意識させるようなはたらきかけも重要である。さらに、次時に指導者のコメントをふまえて学習を行っているかということを確認することも必要となってくる。

ビデオカンファレンス

体育の学習を進めていくと「頭でわかっているけどなかなかできない」という子がいることが少なくない。どれだけ頭でわかっているのかが重要になってくる。もちろん資料を提示して友だちとの教えあい活動を通して自分の姿をつかむことも不可能ではないだろう。しかし、子どもが自分自身を客観視する上で最も効果的な手立てはビデオでふりかえることである。このことにより、指導者の言葉にもより敏感に反応するようになると実感している。重要なのは子どもに対して映像を解説することである。見るべきポイントを的確に示すことが大切である。例えばハードルの学習では、抜き足に注目させた。抜き足が地面と垂直になっているため高く跳んでいる子、抜き足が後方に流れているために低く跳んでいても滞空時間が長くなる子、抜き足を 90° に曲げ低いジャンプですばやくハードルをまたぎこしている子の 3 パターンに分けビデオカンファレンスを行った。このことで子どもは自分の姿を明確に捉え、自分の課題を明らかにすることができ、次時への関心・意欲を高めることができた。またどのようにすれば抜き足の課題を克服できるのかということも、ビデオに写っていた自分や友だちの様子と、自分の運動から得られる感じとを比較しながら問題を解決していこうとする身体と対話する姿がみられた。

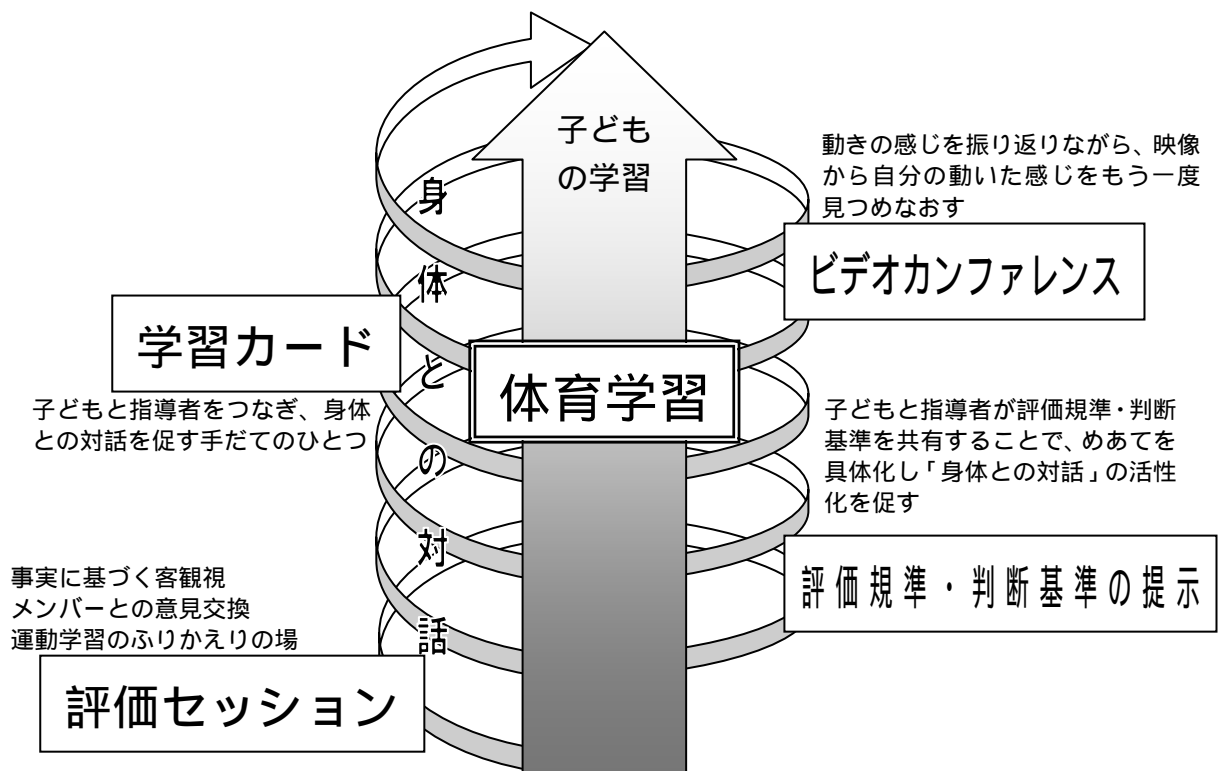


図2 身体との対話が促進される指導の手だて

3 「身体との対話」でつなぐ幼・小・中連携

私たちは「身体と対話する体育学習」が小学校段階だけでなく、子どもの発達に応じてどの段階においても応用されるものであると考えている。体育学習に自らすすんで取り組んでいくとき、動きを感じたり、意識したり、振り返ったりしているのは年齢を問わず常に人間が本来行っていることであろう。また、友だちの動きを意識して観察することで自分の感じと重ね合わせてよりよい動きへと高めていこうとすることもある。

幼稚園お公開授業を参観したときのある園児の例を紹介したいと思う。この園児は長縄の「郵便屋さん」のリズム感が分からなくて跳ぶことができなかった。そこで並んでいる時にじっと友だちが跳んでいるのを観察していた。リズムに合わせて跳んだり、身体を揺らさせたりすることで観察しながら自分も一緒に跳んでいる感じになっていたのである。すると、自分の番になるとリズムに合わせて長縄を跳ぶことができるようになったのである。

幼稚園・小学校・中学校との連携において大事なものは、体育科としてめざしている子ども像の共有である。つまり、「身体と対話する学びを育む」という概念を幼稚園・小学校・中学校で共通理解した上で子どもたちの指導にあたるということである。

本年度は「水泳」という幼・小・中で共通にある活動において連携への具体的な手がかりを探っていくことにした。子どもの発達段階を考慮して幼稚園3年間、小学校6年間、中学校2年間（水泳が行われるのは2年生まで）の11年間で5つの局面に分け、幼・小・中での指導観の共有や授業実践を行った(図3)。

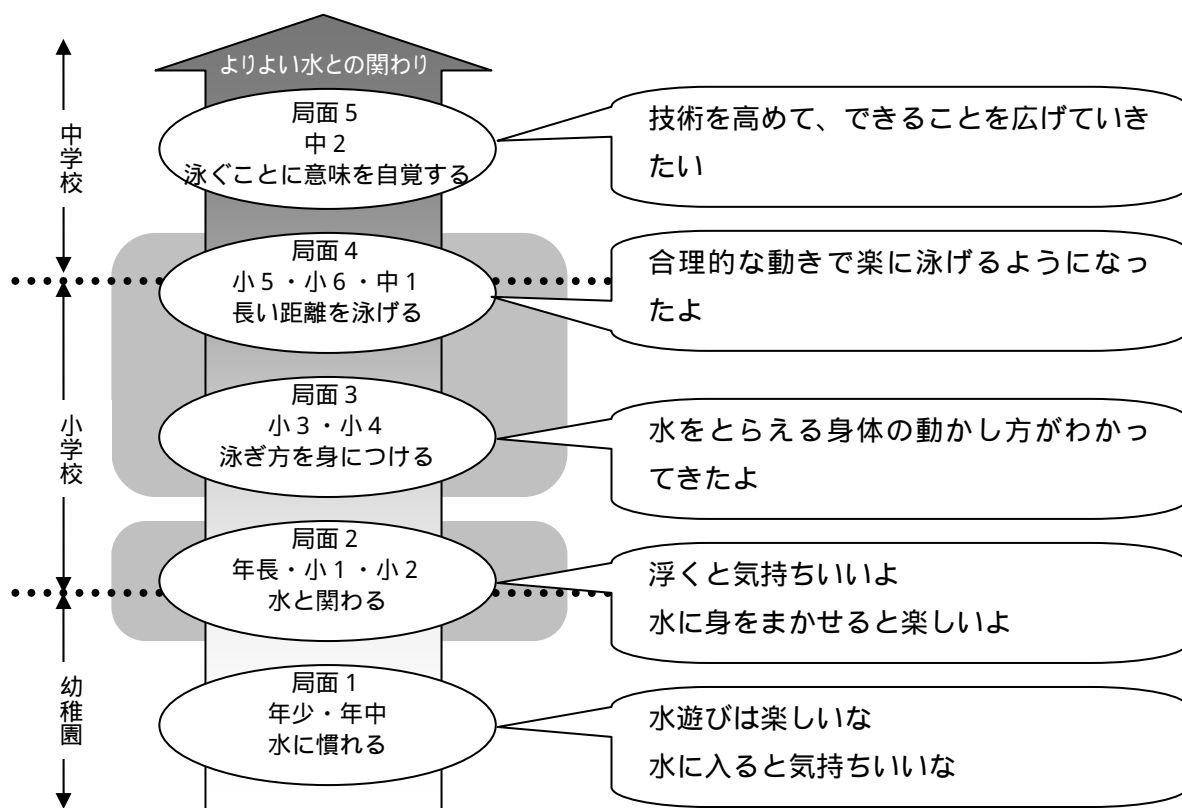


図3 水泳における幼・小・中連携の構想

その結果として、小学校3年生以上で行っている泳力異質の3人バディの学習法は、中学校においても行うことが効果的であるということが明らかになってきた。

泳力異質の3人バディの学習では、泳ぎが得意でない子どもも、相手の動きがどのようなものであるかを伝えることができる。また、泳ぎが得意な子どもは自分の経験を生かして、技術的なアドバイスができる。このときにアドバイスする子は見た様子とともに自分の体感を呼び戻してアドバイスをするであろう。3人の中では、自分の課題を試したものをすぐに見てもらってアドバイスをもらい、さらにもう一度チャレンジしてみるというサイクルがどんどん進んでいく。同時に、自分の動きの感じに対して即時にアドバイスをもらうことができる。このように「自立」して学習を進められるトリオをつくっていくことで、より効果的な学習効果が得られると考える。このようにして、幼・小・中の11年間で水泳学習におけるよりよい水との関わりを育てていこうと考えている。